

市大山岳会ニュース

OCUAC NEWS

2001.12.1

No.33

アイガー（3970m）ミッテルレギ綾を終えて

佐々木惣四郎

8/26-27 に高度順化の為、小笹氏とメンヒ小屋に泊まり、メンヒ（4099m）に登頂した。すでに小笹氏は3年前にミッテルレギ綾を終えておられるので、1人で8/28に基点となるミッテルレギ小屋に向かった。

クライネシャイデックより登山電車にてユングフラウヨッホー行きに乗り、アイスメア（3159m）にてガイドと落ち合い小屋に向かった。小屋（3355m）までもアンザイレンド、雪と緩いスラブ状の岩場が続く、勿論道はなく、正直って緊張した。

小屋は2週間前に新築されたばかりで最終20名余りの泊まりであった。小屋には番人がおり、夕食、朝食がでてすこぶる快適である。ガス気味であったが、上部は驚く程傾斜が強く圧倒された。半分強がガイド付であった。

29日 朝5時、先頭にてスタート。ルートは稜線を忠実に辿るもので、両側は切れ落ちており、岩場自体は3級の連続した感じ。2時間余りで大ジャンダルム（グロサー。ツルム 3692m）に着き、アイゼンをつけ上部に向かった。ここから頂上手前の雪綾までは固定フィックスが続いている。1-2ピッチはベルグラが張り付いており、緊張し

た登りで4級グレイドと思う。いくら固定フィックスがあってガイドのザイルがあるとはいえ稜線上の為、スリップすれば大変な事になってしまう。約200mを登ると雪綾に達し、頂上に至った。

このクライミングは、醍醐味のあるものであり、小屋より頂上まで4時間かかった。高度差615mである。

頂上より南アイガーヨッホー（3759m）にできるのであるが、登り返しの岩場が2箇所あり、疲れた。3時間でやっとヨッホーにたどり着き、メンヒ小屋までの長い雪斜面を行く。小屋に午後1時（合計8時間）に着いて、今回の登はんが終了したがかなり疲れた。

ガイドさん達がいうにはマッターホルンより難しいとの事である。小生もその様に思った。今年は例年に比して雪が多いほうとの事であったが、途中で天候が悪化していれば格段にやばくなる稜線である。又、ガイドのスピードが早い事もある。いずれにしても久しぶりに緊張したスリルあるクライミングであった。頂上よりの高度感も素晴らしい。360度の展望が望めた。稜線通しのクライミングは、高度感抜群でグレイドは高くなくても、十分に楽しめるものである。

☆☆ チロルトレッキング ☆☆

廣谷光一郎

2月に結腸ガン切除手術をし、予定していたJACの仲間とのブータン行きを断念。今度は全快祝いと称して高校時代の朋友とチロル地域のトレッキングに行った。

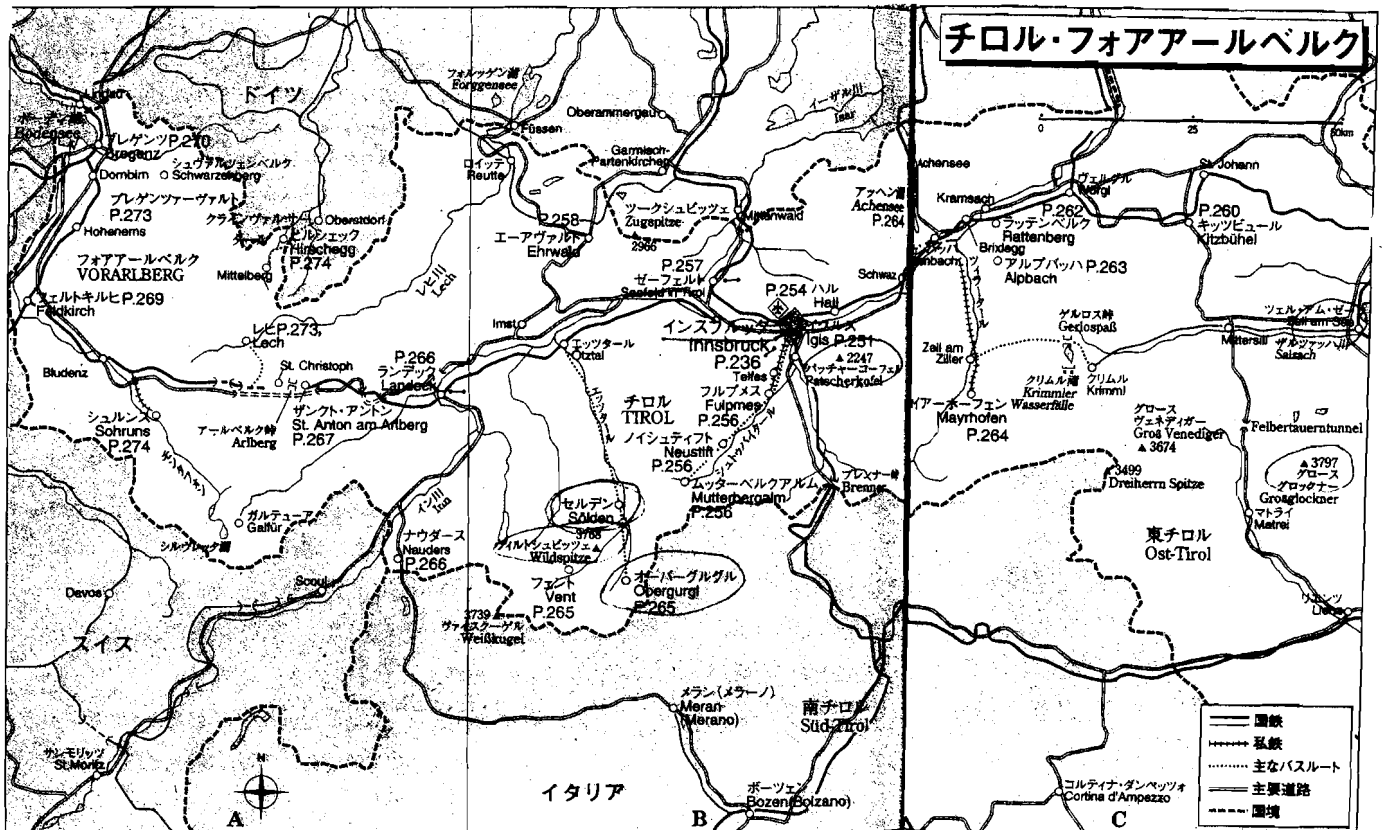
7月13日 ウイーン経由、冬はスキーのメッカで有名なインスブルグに入る。

此处では、イーグルよりローブウエイでパッチャコー

フェル (1564m) に登り、素晴らしい展望ハイキングを満喫した。午後は一旦、インスブルグに降り、北側に屏風のように立っているノルトケッテ山に登る。ケーブルカー、ロープウェイ、ゴンドラを乗り継いで、ハーフェルカール山頂駅 (2256m) へ 20 分足らずである。山頂からは北面の 2500~2700m の岩山の連なりが、その向こうはドイツだ。

7 月 15 日 列車とバスでチロル地方の山中に入って行

ったが、これが大変。20kg ばかりのトランクなのだが、列車やバスの乗降の段差が大きく、乗るも大変、降りるも大変であった。午後 2 時、田舎町セルデン (1377m) に到着。早速、町外れからガイスラッハコーゲル (3056m) に架かるロープウェイでオーストリアで最も高いといわれる山頂駅 (3040m) に登った。3000m 級の山々が連なるスタバイエルアルプスを心行くまで眺望することができた。これは今度のトレッキングで到達した最高地点であったと記憶する。

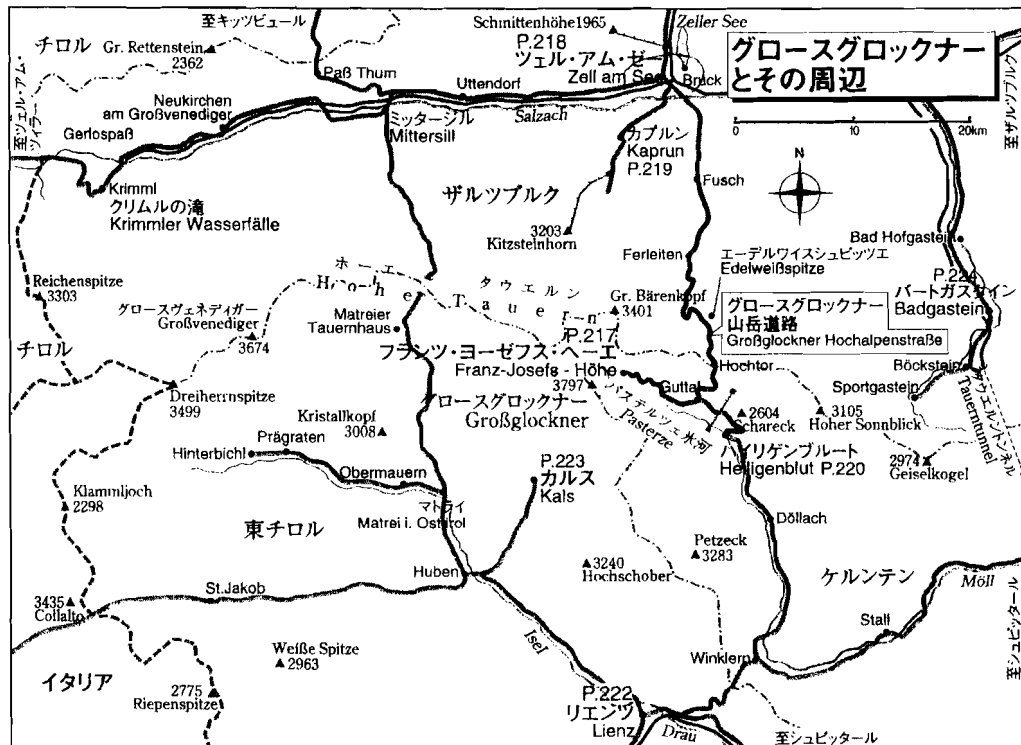


7 月 16 日 バスにてオッタール地区の最奥部にあるオーバーグルグル (1907m) に向かい、そこよりリフトを 2 本乗り継ぎ、湧き上がるガスの中を登ること 30 分、2653m のホエ・ムートに着くと雲上の別天地であった。ガスが晴れ上がり、真っ青な空間に尖ったピークのキルヒエンコーゲル (3280m)、左にガイスベルグ氷河、右にロートムース氷河が美しい U 字溪谷をつくっている。この山麓の向こうがイタリアだ。

小休止してからは下りである。氷河を見下ろしながらムートサルテ (2566m) まではゆるやかなジグザク下りで、約 1 時間半でシェンヴィースヒュッテに着く。暖かいヒュッテの中でのビールの乾杯はこたえられない。昼食後、高山植物の群生斜面をどんどん下り、約 1 時間後には出発地点のオーバーグルグルに帰着した。短いトレッキングとはいえ、久方ぶりの、しかも下りばかりの山歩きでは膝が笑ってしまった。

7 月 17 日 住み心地良かった山村・セルデンを後に、またはや列車でツエル・アム・ゼーに移動した。ツエル・アム・ゼーはツエラーゼーの湖畔にあるリゾート地として有名である。“ツエル”とは修道院の密室という意味があるが、8 世紀末にこの地に建てられた修道院にちなんで湖のほとり“アム・ゼー”と付けてツエル・アム・ゼーという名称が生まれたとか。ともかく我々にとってはオーストリアの最高峰グロッサグロッコナー (3798m) の登山基地である。

7 月 18 日 ツエル・アム・ゼー駅 9 時 15 分発のバスにて出発。1930 年~1935 年にかけて建造された、ヨーロッパアルプス中随一の景観を誇るアルペン山岳道路を南下する。料金所より西北にヘアピンカーブが連続するソネンウエレック (3261m) から連なる尾根筋を登りつめたエーデルワイスシェピッツエ (2571m) はこの道路の最高地点で、展望台からは 30 を越える 3000m 級



の雪山を見渡すことができる。近くはホツハエルテン (3358m)、グロッサバイスバックホルン (3564m)、ホーヘドオク (3348m)、そして遠くにはジオハンナイスベルグ (3469m) 他、多くの山々が連なっている。ここより南斜面を少しづつ下り気味にホックタアル (2503m) のトンネルくぐると、ザルツブルグ州からケルンテン州に入ったことになる。更に下り、雪溪に縁が混ざりあった高原を登りつめてフランツ・ヨーゼフス・ヘーエ (2370m) の大展望台に着いたのは 11 時 30 分であった。

天気が悪いせいもあって気温は 6 度。大勢の人で一杯の展望台からは東部アルプス最大のバステルツエ氷河全長約 10km の壮大な流れが一望できる。しかし、残念ながらお目当てのグロッサグロッコナーの上部ピークは、濃くたれこめた雲によって見る事ができず、頂上付近からの懸垂氷河末端を眺めるにとどまった。展望台から約 30 分下り、氷河に下ってみた。雲が切れないかと 2 時間余り待ったが駄目であった。

この山の頂上への一般ルートは 2 つある。ひとつはフランツ・ヨーゼフス・ヘーエからホフマンスヒュッテを通り、バステルツエ氷河を横断する。岩場を登り、ホフマンスケース氷河上のルートをたどってアドラースルーエ (ワシの休憩所) と呼ばれる地点にあるエルツヘルツオーク・ヨハンヒュッテ 3451m で一泊し、翌日、頂上

を往復するのが東側ルートである。もう一つは、グロッサグロッコナー・ホーホアルベンシュトラッセにあるグロッコナー・ハウスから、マルガリッツエンダム湖の横を通り、シュエトッカーシャルテを越えて南斜面をトラバース。ザルムヒュッテ (2638m) を経由し、エルツヘルツオーク・ヨハンヒュッテで一泊して、翌日頂上に立つという南側ルートである。どちらのルートにしても標高 3451m の山小屋経由での一泊登山となるという。最終バスでツエル・アル・ゼーに帰着したのは 17 時 30 分であった。

7 月 19 日 ツエル・アル・ゼーから列車でザルツブルグへ。ザルツブルグの観光の後、7 月 21 日出発点のウィーンに戻ってきた。

ウィーンに列車が到着すると E メールで連絡をとっていた橋本夫妻が出迎えに来てくれていた。彼らは土、日の休日を返上してブタベストより車で駆けつけてくれたのである。久方ぶりの再会だ。その夜は旧交を暖めながらの日本酒、日本食に舌鼓を打った。

また、夜を徹してのウィーン戦 (橋本君が碁盤を持参した) は、橋本 4 子で 3 勝、3 子で 1 勝 1 敗という結果となり、橋本君いたって好調でありました。

7 月 23 日午後ウィーン発、翌朝、関空に無事帰着した。

比・良・全・山・縦・走

藤本 勇

1966年の夏、大阪府立高津高校山岳部のOBだけで、比良の武奈ヶ岳の山腹に山小屋を建設以来、何百回と比良を訪ねた。武奈ヶ岳の周辺は自分の庭の様に熟知しているが、それ以外の山についてはまるで素人同然である。一度は登山地図の端から端までを歩くのが永年の夢であった。

普通、比良全山縦走をリトル比良－釈迦－蓬萊－権現のルートと言う人もいるが、私は南部の権現・蓬萊から比良山系の最高峰の武奈ヶ岳を経由して北部の蛇谷ヶ峰までの稜線を比良全山縦走と呼びたい。

期間 2001年7月14日～15日

メンバー 小笹孝、佐々木惣四郎、山田裕敏、藤村達夫、藤本勇

7月14日 平登山口(8:05)－花折れ峠への分岐点(8:15)－アラキ峠(8:40-8:45)－権現山(9:15-9:20)－ホッケ山(9:45-9:50)－小女郎峠(10:10-10:30)(池まで往復10分)－蓬萊山(10:50)－笹平(昼食)(11:00-11:50)－木戸峠(12:00)－比良岳(12:40-12:45)－葛川越(12:55)－鳥谷山(13:15)－荒川峠(13:35)－南比良峠(13:50)－金黄峠(14:20-14:30)－八雲ヶ原(15:00-15:15)－高津山荘(15:35)

JR堅田駅下車、タクシーで登山口の平まで4550円。

昔、若狭の鯖を京の都へ運んでいた頃は花折れ峠も人の行き来で栄えたことと思うが、今は立派なトンネルが出来て訪れる人もいない。杉林の中を登る。気温が高いので見てる間にシャツやタオルは汗でグショグショになる。道が笹に覆われたなかにアラキ峠があった。権現山(996m)への登りも苦にならず快適に進む。先頭を行く藤村君は今年の2月に雪山で半月板を損傷して、リハビリのために同行してくれたが、昨年の夏にマッターホルンを登っただけに登りのスピードは速い。権現山の頂上からは琵琶湖、比叡山、そして京都方面が見えるとの事だったが、あいにくのガスで展望悪し。権現から蓬萊・打見までは笹に覆われた山道を歩く。展望が良ければ快適だろう。ホッケ山の周辺から小女郎池にかけては静かな山であった。悲哀の伝説を伝える小女郎池。池の面に対岸の山が逆さまになって写っていた。

比良山系南部で一番高い蓬萊山(1174m)は昔、サンケイバレイと言われた時代にスキーに来たくらいで思い出はあまりない。蓬萊山への登りも大したことはなく、知らない間に着いたという感じであった。スキー場来ると登山道が何処にあるのか分からず、スキー場を下って打見山との中間点にある笹平、まるで遊園地のような場所で昼食をとる。

膝の痛む藤村君は打見からはロープウェイで下山する。我々は打見山からはクロトノハゲを経由するルートを選り、スキー場の中をキャンプ場めがけて下る。立派な炊飯場が出来ていた。木戸峠まで来ると静かな山の

領域となる。

木戸峠には地藏が祭られていた。今までの展望は望めないが、ここからは樹林帯の山道である。知らぬ間に比良岳につく。比良山系にあって比良の名前がついた山であるが、道標だけがある山頂だった。ここから、すぐに葛川越だった。別名、大物峠ともいう。昔、琵琶湖の大物の部落から白滝谷を荷馬車が通ったというが、そのような面影の無い殺風景な峠であった。

鳥谷山(カマト山)を通過する頃より、夕立に会う。暑さで2リットルのボトルの水が見てる間に減っていく。堂満岳の山腹を巻いて金黄峠にでる。峠には中学生の団体がいた。打見山より初めての登山者。ここからは北比良峠への道を進まずに、奥の深谷の源流へ下って八雲ヶ原にでる。このあたりは自分の庭のように勝手知ったる場所で、イワナを釣りによく来たものだ。八雲ヶ原は、さすが夏山でキャンプを張っている人たちで賑わっていた。

今夜の宿泊地である高津山荘までは、もうすぐだ。山荘は昨年の薪の荷揚げ以来である。予定より1時間以上も早く着いた。登山地図のコースタイムの7割くらいでの歩行であった。全身、汗と雨で衣類はグショグショに濡れている。小屋のストーブを焚いて乾かす。

7月15日 高津山荘(5:50)－イブルキノコバ(5:55)－武奈ヶ岳(6:30-6:40)－細川越(7:00)－釣瓶岳(7:20-7:25)－地藏山(8:15-8:25)－ヨコタニ峠(8:50)－アラ谷峠(9:05)－ボボブタ峠(9:15)－蛇谷ヶ峰(10:00-10:40)－(カツラの谷)－ふれあいの里(12:05)－てんくう温泉(12:25)

今日も天気が良さそうなので、早朝出発して涼しい間に縦走してしまおうとの意見で小屋を6時前にでる。一般ルートを経て武奈ヶ岳(1214m)へ。早朝なのに山頂には一組の登山者がいた。恐らくは昨夜、八雲でキャンプしていた人達だろう。山頂よりは天気がもうひとつなので展望がきかない。武奈の北稜は何時も通り歩きづ

らい。釣瓶岳までは何度も歩いた道。釣瓶よりの北方後線は未知の領域である。果たして、どんな山道が続くのだろうか。踏み跡はしっかりしているかな。

釣瓶岳より蛇谷ヶ峰までの後線は本当に静かな樹林帯の山道であった。ウグイスの鳴き声が「ホーホケキョ。ケキョケキョケキョ」とひびき、疲れを癒してくれた。ルート図では釣瓶より地蔵山まで1時間30分と記載されているが、私達は50分で歩く。途中、リトル比良やガリバー村を見る。橋生への道標があったが、ルート図には、そのようなコースはない。ヨコタ二峠からアラ谷峠までは低山の趣のあるところ。畑から登ってきた登山者と出くわす。

ボボブタ峠という所を通過したが、ボボブタとは一体どんな意味があるのだろう。

蛇谷ヶ峰への最後の登りは、すこししんどかった。山頂には一人の登山者がいた。登山者は朽木村から登って来るので、私達のように南から縦走するような登山者は少ないだろう。頂上で大休止してから下山する。ふれ

あいの里に下るのに二つのルートがある。一つは尾根筋、一つは谷筋。私は谷筋を通った。途中に「カツラの木」が谷筋に生えたところがあった。「てんくう温泉」は一階が子供用のプール、二階が温泉になっている。露天風呂はない。入浴料 600 円なり。近郊近在から自家用車で大勢の人が来る温泉場で大変賑わっていた。ゆっくり全山縦走の喜びに浸る余裕などなかった。

JR 安曇川駅まではバスに乗る。720 円。

追記

比良山系の全山縦走路は道も整備されていて、安心して登山が出来る。六甲のように山頂近くになれば車の音がするようなところでなく、比良の山は奥深く、静かな山旅ができる。主後線には殆ど水場がなく、夏場には十分な飲料水を用意しておくこと。高津山荘を利用できない場合はイブルキノコバの近くの「望武小屋」を中継点として利用したら良いだろう。今回のコースは少し無理をすれば一日で走破することも可能だ。

サイクリング 夢見旅

和田城志

GWは本州を日本海より太平洋へ横断サイクリングをした。お盆休みには南アルプスを全山縦走、夜叉神峠より光岳へ、北岳、農鳥岳、悪沢岳も丹念に辿り、甲斐駒を除いてすべてのピークをトレースした。鈍重で見栄えのしない計画ではあるが、それでも完走したら、思わぬ喜びに包まれた。共に八日間、沈殿、停滞なしの全天候型、全日フル稼働の行動であった。地球は狭い、されど日本は広い、との実感を持った。

秋には GWのリベンジで乗鞍から御嶽へサイクリング登山を散行した。以下、二つのサイクリング報告である。

その1・・・ 本州横断サイクリング

計画では本州の脊梁を全て越えようというものであった。なるべく高度差の激しいコースを選び、山岳地サイクリングにしようと考えていたが、五月には雪があることをすっかり忘れていた。最初の加賀白山のブナ才峠でつまづき、御嶽山の長峰峠、中央アルプスの権兵衛峠、南アルプスの夜叉神峠などは越えられなかった。大幅な計画変更で、伊豆半島を一周して横浜を合わせたつもりではあるが、若干の消化不良は否めない。いつか、再訪しなければなるまい。

4月29日 雨、金沢(14:00)ー刀利ダムー福光桜ヶ池(18:20)

ダムまで登って、雪のため渠道通行止めを知り、一旦福光の方に下り、五箇山経由に変更する。しょぼふる雨も前途を祝福してくれていると思うあたり、我ながら楽観的だ。ほぼ無人の桜が池キャンプ地、近くにある桜の湯は静まり返って、露天風呂を独占、雨に打たれながら備案備案。

30日 雨後曇り、出発(6:00)ー五箇山ー白川郷(11:00)ー小島峠[1100m]ー清見(19:00)

白川郷では山下清晨を見て感激した。御母衣ダム、荘川へのいわゆる白川街道はほとんど集落がなくて、

山間の雨散とした風景が続く。東海北陸自動車道の工事現場の幾何学模様がなだらかな山並みに痛々しい。牧戸から道路を北東に飛騨街道を走れば、人家はますます少なくなり、淋しい峠越えとなった。パブルの残骸のような別荘地の瀟洒なレストランで昼食をとった折に、そのマダムが手作りパンを差し入れてくれた。それが貴重な夕食になって、峠を越えた橋の下で野宿となった。

5月1日 曇り後晴れ、出発(5:30)－高山－美女高原－野麦峠[1672m](13:30)－奈川渡ダム－松本(17:00)－宿泊地(20:00)

高山市街を通過したのは薄明かりの中だった。人気がないの古い家並、江戸時代にタイムスリップしたような素晴らしい朝だった。美女高原を越えたコンビニで、野麦峠が二日前に開通したばかりだということを知った。左正面に乗鞍岳を望み、ジグザグの急勾配の道が果てしなく続く。野麦峠、天下の名峠である。峠の語源について、「たおごえ」のたおはたわんだ鞍部の意、もしくは、峠は大抵の場合村の境界になっており、そこにある守り神に供物を手向ける「たむけ」からきている、と何かの本で読んだ記憶がある。野麦は野生の麦という意味ではなく、千ばつの時に穂が白い麦の穂のような実をつけるところから名付けられた地名とのこと。女工哀史と蛋なり、この峠の景色が哀しく見えた。

静かな県道も上高地線と合流すると、急に車量が増え、不愉快な走行となる。新島々、松本と一気に下る。都市のビパークは不快なので、郊外の田園にある公民館の軒下で寝た。

2日 曇り後雪後雨、出発(5:40)－ピーナスライン黒峠[1660m](9:30)－蓼科高原－麦草峠[2127m](16:30)－佐久海ノ口付近(19:00)

曇り後雪後雨、オープンビパークは冷え込んだ。子供の死体とか狂人の裸とか訳の分からぬ悪夢にうなされた。通行止めの県道を直登して黒峠へ。美が原、車山高原そして白樺湖、ピーナスラインは氷雨とガス、風、眺望ゼロの走行だった。蓼科高原の麦草峠(国道では二番目に高い峠とのこと)では横殴りの湿雪になり、除雪された道とはいえ、サイクリングするような場合ではなかった。峠で北八ヶ岳を縦走してきた完全装備の登山者に奇異なエールを送られた。下りでは指先が凍傷になりそうで、度々止まってマッサージをした。高度を下げれば、雪は雨に、日没になって雨脚は強くなり、村の集会所の狭い庇の下にツエルトを張った。

3日 雪後雨一時晴れ、出発(4:50)－小淵沢駅[妻、合流](7:00)－蘆崎－甲府－河口湖湖畔(17:00)

不愉快なびしょ濡れ睡眠、夜半に雨音が静まって安堵したのだが、目覚めてびっくり、牡丹雪がしんしんと降っているではないか。十五センチは積もっている。恐る恐る車の轍を選んで走り始めた。未明で車は少ないが、雪道は危険でとても走れる状態ではない。何度か転倒した。その上、一変した雪景色に勘違いしたのか、逆方向に走ってしまう。道路標識に佐久、小諸方面とあるではないか。とても妻と約束の時間までに、小淵沢駅にはつけない。仕方なく、佐久海ノ口駅からJRに乗った。始発、乗客私だけのワンマントレイン。野辺山の手前で雪のため線路に倒木あり、非常停止。お手伝いしましょうかの私の言葉に謝意を述べて、運転手は線路に降り、一人で片付けた。

無事妻と合流、再び雨の中へ。雨は甲府に着くころから回復し、河口湖への登りは湿気の多い日差しに閉口した。湖の近くに天水温泉があり、汗を流した。

4日 曇り、出発(5:10)－山中湖－御殿場(10:00)－乙女峠[1005m]－芦ノ湖(14:00)－箱根峠－熱海－網代(19:30)

富士は雲の中、バス釣りの気配で目覚めた。山中湖も大勢のバサーたちで賑わっている。龍坂峠より御殿場インターまでの長い下りはおびただしい車の列、どうしてこうも皆、行楽地に群がりたがるのか。芦ノ湖、乙女峠の急坂はきつかった。樹齢二百年以上はあるだろう松の巨木が昔の街道そのままに残されている箱根関所の松並木は壮観だ。これは一見の価値がある。箱根峠より伊豆半島の県道に入れば、快適なスカイラインとなる。十国峠から熱海へは強烈な下り、前のめりになって疾走した。

黄昏迫るヨットハーバー、ウォーターフロントのペーパメントは美しく整備され、天をつく温泉街の夜景が海に輝く。国籍不明、究極のリゾート地も不況のあおりか、活気がない。泊まり場は網代の小さな漁港、堤防の突端に寝転んだ。潮の香と波の音、あ～幸せ。

5日 晴れ、出発(5:00)－伊東－下田(16:00)－石廊崎－妻良港(20:00)

東伊豆は温泉地が多く、至るところに首都圏の人達の別荘がある。しかし、景色は単調で伊東、下田も見るところなし。白浜のサーファーの群れにはちょっと悲しくなった。ままごのような小さな波に、いっちょまえのいで立ちの若者が遊んでいる。ロッジ、ドライブスルー、4WD、ラップに茶髪、まるでウエストコースト(行ったことないけど)のミニチュアもどきだ。夕暮れになってやっと石廊崎に着いた、ここまで来て、

伊豆半島の突先を見ないのはもったいないと、徒歩で往復 2km を峠観光、海に突き出た断崖絶壁の豪快な風景だった。人家も街灯もない真っ暗闇の渠道を山越えして妻良港へ。

6 日 晴れ、出発(5:00)ー堂ヶ島温泉(8:30)ー土肥港(11:40)ー田子の浦(13:00)ー大阪

海上に子供の遊び場用に作られた橋の上で快適睡眠をむさぼった。残月黎明、海鳥の声と波の囁き、出漁してゆく船の気配、海辺の静寂がこんなに快いとは。下田を越えて以来めっきり車が少なくなって、南伊豆

の風光明媚がことさら美しい。連休最終日で皆都会に戻ったのだろう。伊豆に来て、温泉に入らずではちょっと悔しい。奇岩と青い海原を見下ろす町営堂ヶ島温泉は絶品だった。崖の突先に作られた小さな空中露天風呂をたっぷり一時間独占、長旅と湯疲れの身体は芯から快楽に酔った。ハードなサイクリングに付き合いされた妻も改心の笑顔だ。最後には一度も見られなかった富士がその姿を現した。土肥港からフェリーに乗り、まさに絵葉書のような駿河湾と富士を眺めた。本州横断、端から端まで万事充実の旅であった。

その2・・・ 乗鞍岳、御嶽山サイクリング登山

10 月 6 日 晴れ、高山駅(10:00)ー平湯ー安房峠(18:40)

夜行列車は便が悪く、富山経由して高山に着いたのは 9 時半だった。国道 158 号線を辿り、平湯トンネルに着いて驚いた。乗鞍スカイラインは自転車通行不可ではないか。仕方なく上高地乗鞍スーパー林道に迂回することにする。安房トンネルも自動車専用だ。何もかも車優先社会で腹が立った。落ち葉の舞う神の湯の露天風呂で怒りを静めて、安房峠への夜道を歩いた。

7 日 晴れ、出発(6:00)ースーパー林道ー白骨温泉ー乗鞍高原(10:30)ー2600m 駐車場(14:50)ー乗鞍岳頂上(15:40)ー乗鞍高原温泉(17:30)

安房峠からの穂高連峰は素晴らしい景色だった。スーパー林道も走りやすく、紅葉を堪能した。乗鞍スカイラインの有料区間は平湯から 2700m の登山口までで、乗鞍高原側は自転車で登れる。悔しいので往復することにする。連休行楽で車とバイクがひっきりなしに走る中を我慢の一念で走り、歩く。バテ気味の妻は下で待っていると云いながら、結局 2600m の駐車場まで登ってしまう。ひとり頂上をアタック、人込みを駆け抜けた。20km のダウンヒル、中年暴走族で高原温泉に駆け下れば、露天風呂とビールの祝福が待ち受けていた。この観光地で本当の快楽に酔っているのは我々だけだ、と氣勢を上げた。

8 日 曇り後晴れ、出発(4:30)ー奈川温泉ー境峠(9:00)ー国道 19 号線葦原ー国道 361 号線ー長峰峠(17:00)ー日和田高原(18:30)

今日は御嶽山への移動日、三つの峠を越えなければならない。白樺峠から野麦街道に下れば奈川、再び登りとなって、信州と木曽の分水嶺が境峠、長い下りは快適で、中山道の葦原に着く。木曽大橋から国道 361 号線に入ると再び長い登りとなる。地蔵トンネルを抜ければ開田

高原、いかにも近代になって開墾区画されたと思われる丘陵もいたるところにススキの原が広がり、農業の衰退を感じさす。御嶽山の雄姿が淋しくたたずむ。長峰峠は木曽と飛騨の分水嶺だ。峠を越えた渠道の分岐点にあるレストランでディナー、岩魚丼が美味しかった。暗闇の渠道を日和田高原まで走り、道端にテントを張った。満天の星空の下、携帯コンポで御嶽ブルー・ノート・クラブ、ウイスキーをなめながらジャズを聴いた。ジェリー・マリガン、アート・ベッパ、ヘレン・メリル、至福のひとつきだった。

9 日 晴れ後小雨、出発(4:30)ー胡桃島自転車デポ(7:30)ー御嶽山頂上(10:30)ー濁河温泉(13:30)ー飛騨小坂駅(15:40)ー大阪

御嶽スキー場までは二車線の立派な渠道だったが、そこを過ぎると途端に林道のような悪路となった。本当に現金な行政だ。胡桃島キャンプ地で自転車をデポ、妻は仕事の都合で先に下ることになり、御嶽山は一人で往復することになった。連休明けの山は人気がまるでなく、木漏れ日の差す樹海に、木々や落ち葉の甘い香りが匂い立つ。五の池小屋で鞍轡に出れば、秋晴れの景色は白日夢のような静寂に包まれている。ライトブルーの二の池の水面を微かに風がわたる。頂上社と山小屋の扉はかたくなに閉ざされていた。八時間のコースタイムを五時間で往復したことになる。さあ、下山一路。登山口にある濁河温泉の村営露天風呂は本日混浴との表示があった。無人の湯に浸かりながら、不倫失恋一人旅の叶姉妹みたいな O L でも来ないかと期待したが、来たのはひなびた禿げの老婦だった。飛騨小坂駅までは 38km の下りだ。とんでもない急勾配の山壁、路肩注意のトラバースの渠道は空を走っているようだ。低く垂れ込めた雲が山を被ってゆく。駅に着くころにはばらばら雨が降り始めた。まずは完璧に近いサイクリング登山であった。

北穂池探訪と事故の顛末

— 事故はいつどこで起こるか分からない —

藤本 勇

槍・穂高連峰の標高 2000m 以上の地点に 4 つの池がある。

北から順番に、

1. 槍沢の天狗原の天狗池 2. 北穂高の東面の北穂池 3. 前穂高の奥又白谷の奥又白池 4. 明神東穂の瓢箪池である。一般の登山者が訪れることのできるのは 1 の天狗池、

後は熟練者のみが許される池だ。

3 や 4 は若いときに岩登りの合宿で訪れた。2 の北穂池は槍と北穂の間の縦走路を歩いていると望見できるが、実際に訪れる人は少ない。

愚息は信州大学在学中に 4 シーズンを北穂高小屋でアルバイトし

ており、いつも「オヤジ、北穂の池を知ってるか」と言っていた。

そして「北穂の池は本当にいい所やで」と。機会があれば一度は訪ねたい場所であった。また、秋の濁沢も訪れてみたかった。

期間:平成 13 年 9 月 26 日～29 日

メンバー:小笹、佐々木、藤本

9 月 26 日 晴れ

上高地(7:45)→明神(8:30-8:35)→徳沢(9:20-9:45)→横尾(10:40-11:00)→横尾本谷(12:00-12:15)→濁沢テント・サイト(14:20)

駒ヶ根のヒュッテを早朝出発する。久しぶりの上高地であったが先を急ぐので素通りする。奥又白の出会いにある、泉・佐藤・三島さんたちが建立された銅板碑が数年前の鉄砲水で壊されたので、濁沢の帰路には久しぶり

に立ち寄って銅板がどうなっているかを確認することとする。

本谷の出会いは大勢の人たちが休憩されていた。大半の人たちは濁沢の紅葉を見に行く人たちであろう。

9 月 27 日 晴れ後曇り 濁沢 TS(8:20)→ゴルジュの上(9:15)→北穂小屋(10:45)

奥穂を日帰りで行く予定であったが、天気が下り気味とのことで変更して、今回の目的である北穂池探訪のために北穂に登ることとする。北穂の南穂の取り付きまでのナナカマドの紅葉が素晴らしい。振り返ると前穂

高北尾根の稜線が鋭く聳えていた。

息子が連絡しておいてくれたので、北穂高小屋のサービスは満点。夕食後、小屋番の足立さんから北穂池へのルートを教えてもらう。

9 月 28 日 小雪のち晴れ

北穂高小屋(8:20)→A 沢のコル(9:40-9:45)→北穂池(11:00-11:30)→北穂東穂(13:00-13:10)→濁沢 TS(15:00)

夜来の雨が明け方から雪になった。小屋の前のテラスに 2-3 センチほどの新雪が積もった(翌日の新聞によると昨年より 24 日早い初冠雪との報道)。

8 時頃になって雪もやみ、槍や横尾の本谷が見えた。ここより北穂東穂の北側に小さな池が見えた。今日はあの池を巡って濁沢までの行程である。

小屋からは大キレットへの縦走路を下る。飛騨泣きの難所は新雪が薄く積もっている。振り返ると滝谷の岩場が薄気味悪く聳えていた。A 沢のコルまでは初冠雪の中を慎重に下降したので時間がかかった。

ここからは横尾の本谷源頭部の流心には背を向けて、右下方にトラバースしてガレ場に行く。途中で 10 メートルほどの灌木帯があって、ブッシュ漕ぎをさせられた。小尾根を乗り切ると北穂池が見えた。コルからは踏み跡もケルンもなく、浮き石だらけのガレ場であった。

【事故発生】

先に行く佐々木君に追いつこうとしてガレ場の浮き石でバランスを崩して 5m くらい滑落する。出発前に着込んだ冬用のダブルヤッケを歩きながら脱ぎ捨てていた。右膝の鷹の所を強打した。左のメガネレンズにひびが入っており、右膝からの血が靴を汚している。右の肋骨も少し痛い。幸い頭は打っていないようだ。最後尾を歩いていた小笹君に頼んでストックなどを回収して貰う。薬を持っていなかったので応急手当もできずに、そのままの状態北穂池に向かった。

北穂池は大小 3 つの池からなっている。真ん中の池からはピラミダルな常念岳が見えた。天気が良ければ 2-3 日、本でも読んでゆっくりとしたい場所だ。テント場が一つだけあった。ゆっくりと昼食を食べたかったが、濁沢までの道程が心配なので急いで出発する。

足立さんに教えられた「細い沢」を入り、草付きの嫌なルンゼを登る。緊張を強いられるので、先ほどの事故による怪我の痛さを忘れた。何とか北穂東稜のゴルまで自力で登ることができた。

ゴルから北穂沢への下りは斜度 60 度はあろうかと思う岩場を降りねばならない。クライミング・ダウンで慎重に下っていく。一般道に出からは緊張も融けたので、体の痛みがひどくなり、休み休みして溜沢のテント・サイトまで頑張る。

溜沢ヒュッテに行き、救急箱から消毒剤と包帯を買って傷口の手当を小笹君にしてもらう。膝の下で横 5センチ、縦 5 ミリほどの裂傷であった。

面が朝日に輝いていた。僅か 10 分で豊科のヘリポートに到着する。救急車が一台待機しており担架に乗せられて車内へ。初めて乗るその車の中で、救助隊員から事故の状況などを質問された。

9 月 29 日

昨日の怪我の痛さで、ほとんど一睡もできずに朝を迎えた。果たして上高地まで歩けるだろうか。テントを撤収して個人装備だけで山を下りようとしたが、膝の痛みがひどく歩くことができない。恥を忍んで溜沢ヒュッテの山口支配人にヘリコプターの出動を要請した。

山口支配人「お客さんは山岳保険に入っておられますか」

小生「日本山岳会の保険に入っています」

山口支配人「それでは上高地に民間のヘリが来ているので、それ呼びましょう」

土曜日で病院も昼までのところがほとんどだろう。午前中ならば専門医に看てもらえると思い、時間を考え、民間機にした。長野県警のヘリなら費用はかからないが、民間のヘリならば請求はどのくらいか。

出動を依頼してから 30 分もせずにヘリが飛来してきた。ネパールでは何度もヘリコプターに乗ったが、日本国内では初めてである。付添人は一人は OK とのことなので佐々木君に乗って貰う。屏風の頭の近くを越え、梓川を一またぎして豊科の町に飛ぶ。後方には前穂高の東

病院は豊科赤十字病院。整形外科の救急扱いに回された。レントゲン撮影では骨には異常は見あたらず、若い担当医が麻酔注射をしてくれ、右膝下を 6 針縫った。

激痛が走るなか徒歩で豊科警察署の地域課に出頭し、遭難事故報告書の用紙を買ってくる。担当の警官に詳細な説明をしようと思ったが、先ほどの救急車での受け答えが既に報告されていた。警官から、「山岳遭難防止対策協会」より「救助出動費」が請求されるので支払いをするように言われる。

下山時には膝の痛む小笹君が、8 時過ぎに溜沢を出て上高地まで車駄天のように駆け下り、沢渡で車を拾って病院まで駆けつけてくれたのが午後 3 時半頃であった。これには頭が下がった。

帰阪後すぐに保険代理店に事故報告をすると、保険会社宛の「損害保険金請求書」なるものが送られてきた。

[追記]

1. 山岳保険は装備の一つである。山登りをする人は山岳保険をかけねばならない。
2. 抜糸は 10 月 10 日。肋骨の痛みは 10 月 20 日頃まで続く。その間、湿布とコルセット。
3. JAC の団体傷害保険に加入している。死亡・後遺傷害 200 万円、遭難捜索費用 200 万円、年間保険料は 11,150 円 (F1 コース)。
4. ヘリコプター代は 42 万円。救助出動費は 2 万円の請求があった。もっと大きな遭難であれば捜索のヘリ代や救助費は数百万円だろう。

5. 損害保険会社の審査があって全額保険で適応されることが決まったのが 10 月 26 日。
6. 保険代理店の人の話では、最近是一般道で捻挫をしたり、一晩山小屋で泊まっていたら気分が悪くなってヘリコプターを呼んだりしているケースもある。まるでヘリをタクシー代わりに思っている登山者がいる。保険請求に際しては事故の救急性で判断されるそうだ。損保会社も救急性の低い事故？の場合は保険の対象にしないそうだ。



階段登高と登山のスピードくらべ

筆者は以前、駅の階段を上る人の登高速度を観察したことがある。駅の階段は30～40段程度である。また1段の高さはほぼ16cmに統一されている。だから標高差は5～6mくらいになる。

通勤ラッシュ以外の時間帯に、自分のペースでゆっくり登っている人の登高速度を調べてみると、大体20～30秒で登っていた。これを登山の1ピッチ（50分間）当たりの登高に換算してみると、700～800m登る計算になる。

一方、山で標準コースタイムの通りに登ると、1ピッチで約300m登ることになる。だから、階段登りは山登りの2倍以上のハイペースで登っているのである。

駅の階段の傾斜は約25度である。これは、登山道の中でも最もきつい部類に属する。『ランニング登山』の著者、故・下嶋溪氏の調べによると、急坂で有名な北岳の大樺沢の登りが25.5度、谷川岳の巖剛新道の登

りが24.4度だという（ちなみに一番急なのは、南アルプスの策ヶ岳に登る大武刀尾根で、29.1度だそうである）。

つまり、私たちが日常生活の中で何気なしに階段を登っているときには、最も傾斜のきつい登山道を、通常の登山の2倍以上のスピードで登っていることになるのである。

このようなことが平気のできるのは、階段の標高差がわずか5～6mしかないからである。だが、標高差が何百mもある実際の山では、このようなペースは通用しない。初心者が山でバテやすいのは、日常生活での階段登りのペースが頭に刻み込まれていて、山でも同じペースで登ってしまうからだろう。

本文（p26）で、登山をするときには平地歩行の半分以上のペースで歩かないとバテてしまう、と述べた。階段歩行との比較から言っても、やはり半分以上のペースで登ることが必要なのである。

東京新聞出版局刊 山本正嘉著『登山の運動生理学百科』より

<会員消息>

昭和 38 工卒 苑樹 寛さんが平成 13 年 7 月 27 日ご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

<住所変更など>

住所録を同封しております。ご参照ください。

市大山岳会ニュース
大阪市立大学山岳会発行
会長 池永薫爾
編集 矢倉睦